

哲学にとっての母語の問題

—ハイデガーのヘルダリン解釈をめぐる政治哲学的考察

仲正昌樹

ハイデガーのヘルダリン解釈は、中期以降のハイデガー哲学を理解するための重要なカギであると同時に、[哲学—詩（芸術）—政治]の三者関係について一般的に考察するうえでの重要なヒントを提供してくれる。それだけに、ハイデガー哲学の“(非)政治性”をめぐる政治的な対決の焦点にもなりやすい。この報告では、ハイデガーが存在論的に特権的な地位を与えていると思われるヘルダリンの詩作品が、ハイデガーにとっての母語であるドイツ語によって表現されていることに焦点を当てながら、「哲学者にとっての母語」をめぐる問題について考察していく。ヘルダリン解釈に見られる、母語の世界に沈潜するような身振りを、最初から危険視するのではなく、そこにどのような理論的あるいはメタ倫理的な問題が含まれているのか、アドルノ、デリダ、スタイナー、ラクー＝ラバルトなどの議論を視野に入れながら、可能な限りニュートラルに分析することを試みたい。

① ハイデガーにとっての[言語—母語—詩的言語]

- ・ハイデガーの言語観の特徴
 - 非分析的・非記号論的 (cf.カルナップによる批判)
 - 存在論 (『存在と時間』) との繋がり
 - 〈legein〉するものとしての言語

- ・言語—思考—詩作
 - 言語＝存在が語になること＝原詩作 (Ur-Dichtung)
 - (『形而上学入門』五三節)
 - 言語と詩作の根源的な繋がり
 - 思考 (哲学) に先行する詩作
 - ↓
- ・民族 (Volk) にとっての「詩作」
 - ある民族は原詩作において存在を詩作する
 - 詩作は歴史的な民族の原言語 (Ursprache) である
 - (Cf.ラクー＝ラバルト『政治的なものの虚構』)

② ハイデガーのヘルダリン解釈と民族の原詩作

- ・ハイデガーのヘルダリンに対する関わり方
 - ヘルダリンの詩作したものを思考する (≠文学作品としての解釈)
 - ヘルダリンの文学史・思想史的位置付けを拒否
 - ↓
- ・ドイツ民族の詩人としてのヘルダリン

合図 (Wink) を民族に伝える

民族にとっての存在 (永続するもの) を樹立 (stiften) する

詩人の詩人：他の詩人の詩作の限界線を確定

ギリシア人にとってのホメロスに相当

↓

- ・ヘルダリンの祖国的転回

「固有なもの／異質なもの」

「天の火」と「叙述の明晰性」(対称的な関係か?)

- ・ヘルダリンを通してのドイツ語の革新への期待

危機の中での新しい詩的言語による (祖国的) 存在樹立

言語が源泉から生じてくる現場への立ち会い (?)

→新たな存在論のための語彙の獲得

(ジョージ・スタイナー)

復古的・懐古的なナショナリズム (政治的ロマン主義) との違い

: ヘルダリンの唯一性の強調

(ラクー＝ラバルト、クラーク)

③ ハイデガーのヘルダリン解釈の“政治”性をめぐる問題

- ・「祖国的存在の樹立」というテーマと、「詩的言語」の安定性

「祖国的存在」の樹立は達成されたのか?

達成されたとすれば、どういう意味で?

↓

- ・アドルノによる批判

Parataxis ⇔ Synthesis

非同一性

同一化の論理

「精神」への還元不可能性

→中期以降のヘーゲルに接近

両者に共通する解釈の“根拠”への志向 (?)

(ラクー＝ラバルト)

- ・デリダによる問題提起

「精神 Geist」を中心とするドイツ語の特権化

ギリシア語との類縁性→ドイツ語の優位

- ・哲学は、(中心を外れされた)「詩的言語」に対して距離を取ることが可能か?

;そもそも距離を取る必要があるのか?

哲学にとっての安定した足場はあるか?

(Cf. アーレントの母語に対する信頼 (?) ⇔ポリス＝記憶の共同体)